

他者の苦難について

一足の登山靴とザック、レインウェア、緊急避難用のツェルト。必要最小限の道具を買って、奥秩父、多摩と山を歩き始めた。二〇一一年秋のことだった。春には、残雪の奥秩父を目指した。上高地から梓川に沿って歩いた。明神、徳澤と越え横尾山荘で一泊する。翌日はクランポンを履き、残雪の濁沢へ登った。急登に呼吸が乱れ、吐く息が白く凍えた。予定ではそこから穂高小屋に向かいさらに一泊して、奥穂に向かうことになっていた。が、濁沢で雨が雪に変わった。風が出て視界が悪くなった。山小屋の親父が「今日はよくねえ」と言った。奥穂山頂は断念した。その分時間が空いた。停滞し、空いた時間で、本を読み、それに厭きると、真っ白な空を見ながらなげいま自分がそこにいるのか考えた。

誰が言ったか。次のような言葉があることを知った。

親の死——それは、あなたの過去を失うこと。
子供の死——それは、あなたの未来を失うこと。
配偶者の死——それは、あなたの現在を失うこと。
友人の死——それは、あなたの一部を失うこと。

自らの過去や現在を失った者たちは、それ以降の人生をどのように歩んでいけばよいのか。自らの未来を失うとはどういうことか。家族とともにあったはずの過去が、ありうるはずであった未来が突然断ち切られるということの哀しみ、それは、いかほどのものか。たとえいくら言葉を尽くしたとしても、愛する者を失った哀しみが消えることはない。一歳になる娘と妻を失った男がある夜言った。

「生き残ったということに理由はあるのか。神の偶然だとすれば、それはあまりに残酷な偶然だ。それが神の意思であるとすれば、そんな神を信じることはない」

男は拳で地面を殴った。殴った拳からは血が滴った。その血が雪を染めた。余震は大地の身震いのようだった。それでも満天の空には零れんばかりの星が溢れていた。朝が再び来るかどうかさえ確信が持てなかったが、これまでに見たどんな星空よりきれいだった。それは「生と死」の対立の中で見た壮絶な美しさだった。

山本太郎

二〇一一年三月。わたしは岩手にいた。内陸に位置する遺野に拠点を置き、海沿いの町、上閉伊郡大槌町との間を往復しながら震災後の支援にあたっていた。東北岩手の三月は寒く、気温は氷点下を切った。降る雪が時折町の姿をかき消した。

「雪でよかった」とつぶやいた女がいた。消えてなくなった町の姿を覆い隠すその雪が救いだと言った。

幼い子供を亡くした母親。母を失った父子。生徒を亡くした教師。患者を助けることのできなかつた医師。友人たちの死。自責と慟哭が空を覆っていた。

（どうしてこの人たちは、こんなにも哀しい目に遭わなくてはならないのか）と思った。

「宇宙」の「宇」は空間、四方の果てを、「宙」は無限の時間を表すという。そんな世界を星が満ちていた。

山を歩き始めたのは、それから半年ほどしてからだった。未だはつきりとした理由を見つけたことはできない。ただ、あの日見た星空をもう一度見たいと思ったことが動機のひとつとなったことは、間違いないさそうである。さらにいえば、震災後救援のなかで右往左往したわたし自身がもう一度、何らかの物語を紡ぐ必要に迫られていたのかもしれないなかった。

雲海を突き抜けた山の上で、テントから見ると星はいつもせないほどにきれいだった。

そして山は思索の時間を与えてくれた。山で読んだロジェ・デュブラの詩――。

いつかある日 山で死んだら／ふるい山の友よ 伝えてくれ／母親には 安らかだったと／男らしく死んだと 父親には／伝えてくれ いとしい妻に／俺が帰らなくても 生きて行けと／息子たちに 俺の踏みあとが／ふるさとの岩山に残っていると／友よ 山に 小さなケルンを積んで墓にしてくれ ビッケル立てて／俺のケルン 美しいフェースに朝の陽が輝く 広いテラス／友に贈る 俺のハンマー／ピトンの歌声を 聞かせてくれ。

ビトンとは、ドイツ語でハーケンのこと。岩壁登攀や氷瀑登攀に用いられる金属製のクサビである。岩の割れ目や氷に打ち込み、カラビナやザイルを通して登攀の手がかりとする。それをフランス語でビトンという。美しい山の側面に、ケルンを積み、亡き友のビッケルを立てる。それが残ったものの務めだという詩だ。ロジュー・デュブラはこの詞を作ってからまもなくヒマラヤで消息を絶った。

生き残ったということは、死んだ者に対して何らかの負債を負うということなのかもしれない。あいつが生きていればしたであろうこと。残したであろうこと。生き残った者にはそれを行う義務のようなものがある。それが、生き残った者たちの存在理由となるのだろうか。

自らの物語を紡ぐ必要があるのは、わたしばかりではなかった。現場から送り続けたレポートを読んだ友人の一人から次のような手紙をもらったことがある。

これまでの通信ありがとうございました。貴重な追体験のための窓でした。お疲れ様でした。もっとも、このドラマには終わりがありません。しょうけれども。

つい先日、日本で一七年暮らしたフランス人の女性と話をする機会がありました。彼女は神戸の地震を西宮で、このたびの地震を東京で体験したといひます。それにひきかえ、僕

は神戸の時には寿府赴任中、今回は巴里です。民族が共有すべき悲劇の場にはいないということで、自分の日本人としてのアイデンティティが崩壊し始めているような気さえています。

その場に居合わせるのも辛いことですが、その場に立ち会えないのも苦しいことです。それはそれとして、部外者だからできるようなことがあれば、何かの役に立ちたいと思っています。

友人はヨーロッパに本部を置く国際機関で長く働いている。

*

東日本大震災の一年前、二〇一〇年一月には、カリブ海の島国ハイチで地震があった。地震の直後、ハイチへ入った。首都が直撃され、三〇万人にも及ぶ死者を出した。被害状況は、壊滅的という言葉が相応しいものだった。政府庁舎や病院施設といった建物が全壊し、水、電気、通信が壊滅していた。二週間にわたって被災者の治療にあたったが、搬送先のない重症患者が目の前で亡くなっていくのを座して見守るしかない状況に心が悲鳴を上げた。

医師として、初めて救うことをあきらめなくてはならない患者と出会った。限られた医療資源のなかで、最善の救命効果を得るために、救うべき人を選別する。そのことを私たちは「ト

ことなのか――。

*

リアージ（選別）と呼ぶ。災害や紛争といった医療資源が限られた状況では、行うべき対策である、教えられてきたし、また教えてもきた。しかしそのこと、患者選別の持つ意味を本当に理解していたかということとは別物だった。最大限の医療資源を投入すれば救えたかもしれない命を何人も天に任せた。そのことに心が悲鳴を上げたのだ。

ハイチは、二〇〇三年から〇四年にかけて、一年ばかりの月日を過ごした国だった。しかし二〇〇四年の内戦下にニューヨークへ脱出して以来、一度も訪れる機会がなかった。六年ぶりのハイチだった。かつて世話になった知人のうち、消息の知れた者もいれば、消息が知れなかった者もいた。

そのとき見たハイチの星空も、透きとおるほどきれいだった。サテライトを地上へ照射するヘリコプターがときどきその空を切り裂いた。

残された者はいつも、何かの負債を抱えて生きていくという

二〇一二年七月、フィールド研究のため、中国青海省を訪ねた。青海省は、平均標高が三〇〇〇メートルを超える西蔵（チベット）高原の東端に位置する。中国最大の塩湖青海湖を抱える。湖畔、テントで一泊した。歯の根も震えるほどの寒さのなか、夜空は星で満ちた。同行した一人の中国人がその星を見てつぶやいた。

「今日も満天の星空の下で」と。

男は、一〇年ほど前、日本に私費留学した。留学当初、奨学金もなく、街の酒店で酒配達のアルバイトをして生計を立て勉強をしていた。仕事が終わるのは、夜一時過ぎ。男は、毎日疲れた体を引きずるようにして家路を歩いた。傍らに在ったのはいつも一台のラジオだったという。そのラジオから聴こえて

怖い本と楽しい本

第二弾 刊行!

毎日新聞「今週の本棚」20周年名作選 1998〜2004

丸谷才一
池澤夏樹 編

毎日新聞書評欄「今週の本棚」20周年記念刊行。大好評「愉快な本」と立派な本に続き、今回は、1998年から2004年まで7年分の名著名書評が二冊に。豪華執筆陣による読書の羅針盤再び誕生！



978-4-620-32102-8

毎日新聞社

〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
http://books.maiichi.co.jp/

装丁・和田誠

定価3675円(税込)

きたのが「今日も満天の星空の下で」という言葉だった。雨の日も、雪の日も。空に一点の星さえなくても、ラジオは「今日も満天の星空の下で」と男に語りかけた。それはまるで、夜空に星はなくとも、あなたの心のなかには、いつも星があるはずだと語りかけてくれるようだったと男は言った。その言葉がその時代の彼を支えてくれたというのである。

その言葉を頼りに帰国後番組を探してみた。すこし予感めいたものはあった。一九六七年に放送が開始されたラジオ番組だ。放送は平日午前零時から始まる。男が覚えていた言葉は少し違っていた。そのことを男には伝えなかった。

《遠い地平線が消えて 深々とした夜の闇に心を休める時 遙か雲海の上を、音もなく流れ去る気流は たゆみない宇宙の営みを告げています。満天の星をいただく、果てしない光の海をゆたかに流れ行く風に心を開けば、きらめく星座の物語も聞こえてくる。夜の静寂の何と饒舌なことでしょうか。光と影の境に消えて行った遙かな地平線も、腋に浮かんでまいます》
二〇一一年三月——。大学を卒業し、深夜放送を聴かなくな
ってから四半世紀ほどが過ぎていた。

毎日、数時間の睡眠で動き回っていた。そんななかの三月二
一日深夜、クルマのラジオから懐かしい言葉が聴こえてきた。
パーソナリティーの大沢たかおが被災者へのエールを送りつつ
生放送で番組を進行していた。それは、おそらく男が毎日聴い
ていたというラジオ番組だったに違いない。わたしも学生時代

によく聴いた番組だった。

久しぶりに草原に大の字に寝そべってみた。草の匂いがした。
青海から帰国したこの夏、時間の許す限り山に登っている。
北アルプスそして八ヶ岳。日の出とともに起き、独りで、一日
に六時間も七時間も歩く。汗が滴り落ちる。登れば呼吸が詰ま
り、歩けば腹が減った。当然のことに改めて驚いた。くたくた
に疲れきった体はそれでも、短い休息や食事に反応して確実に
元気を回復した。そんな単純なことに喜びを感じた。そしてま
た歩き始める。森林限界を越えたと視界を遮るものはなかった。
夕方、山は落日に赤く映え、夜、澄んだ空気のなかに星が輝い
た。遠くに街の小さな光が見え、それが渾然と闇に溶けた。
積極的忍耐を要求する山は、「わたし」という存在が、大き
な自然の中でいたって小さなものだとということを教えてくれる。
そんなとき、ここからもう一度始めるしかないと思うことがあ
る。「わたし」が為すべきことを始めるために。そして「わた
し」は山に溶けていく。

「好静既世」

権力の病理 誰が行使し誰が苦しむのか

フーコー 30年以上にわたって貧困圏で無償医療活動を行ってき
た医師・人類学者が、偉大な豊かさの時代においても最も基本的な
権利（生きるための権利）が無残に蹂躪されていることを多くの例
証によって示す。 豊田英子訳、山本太郎解説 五〇四〇円（税込）